

令和 6 年度 自己評価表

中長期目標	○学びを生かし、社会とつながりを持ちながら、自分の夢や目標に向かい行動する生徒の育成。 ○学びを自信にかえ、多様さや変化に富む社会を生きる力の育成。	今年度の重点目標	1 生徒一人ひとりの「わかった」「できた」を大切にしたい学びの積み上げ 2 生徒誰もが安心して学ぶことができる環境づくり 3 学び直しを希望する人とつながる（ニーズの掘り起こし）
-------	---	----------	---

年度当初				評価結果（10）月			
評価項目	評価の具体項目	現状	目標 (年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1 生徒一人ひとりの「わかった」「できた」を大切にしたい学びの積み上げ	多様な資源を活用し付けたい力を伸ばすきめ細やかな指導	・学習面談等とおして各々の学習経験や学力実態、学習目標に応じた指導を行っているが、より一層学習の理解度や積み上げに応じた対応が必要な生徒もいる。 ・ゲストティーチャー等の活用はできている。 ・学習ボランティア（鳥大生）の受入れを計画している。	・生徒アンケート「授業満足度」の肯定的評価 80% ・生徒各々の今年度 1 年間の重点目標が概ね達成されている。	・学習面談の定期的な実施（年 5 回）と教職員間の情報共有を図り、「個別の学習計画」に基づいた授業を実施する。 ・ゲストティーチャーや学習ボランティア（鳥大生）、近隣他校との連携を推進することで、生徒の学びをさらに深める。 ・学んだことを実生活に役立てる学習を工夫する。 ・学んだことを関連付ける教科横断的な授業の工夫で、より深い理解を促す。	・生徒アンケート「授業満足度」は85.0%で、登校している生徒はおおむね満足している。 ・学んだことを実生活の場面と結び付けたり、他教科の学びと関連付けたりして授業を展開している。 ・ゲストティーチャーや校外学習で生徒の学習に対する視野を広げることができている。	B	・学習面談等の結果等を個別の学習計画に追記した上で、教科担当者や情報共有を図り、個々の目標達成につなげる。 ・学習効果をより高めるため、ウエルカムゲストティーチャー事業の事前事後の学習を充実する。
	学び方を知り、わかった・できたを実感できる授業の工夫	・ICT等を活用し、視覚化や構造化された授業を進めている。概ね基本的事項の定着を目指しているが、いかにして生徒の学力の定着を見取ることが課題である。 ・生徒の既習状況は予想以上に多様であり、現在の教育課程（時間制等）をより生徒の実態にあったものにしていく必要がある。	・生徒が自分に合った学び方を選択し、主体的に学習を進めることができる。 ・生徒アンケート「ICTやワークシートなど、いくつかの選択肢があり、自分に合った学び方を選ぶことができる」の肯定的評価 80% ・生徒アンケート「授業はわかりやすい」の肯定的評価 80%	・ICT（デジタル教科書、Google Classroom、動画等）やワークシートなど、複数の学習方法を示し、生徒が自分に合った学び方を選べるようにする。 ・意見発表などを取り入れた対話的な学習を進める。 ・新しい学びや気づきのある学習課題を意識した授業を行う。 ・毎時間の授業の振り返りとその記録に努める。 ・次年度実施教育課程の検討と改善を行う。	・生徒アンケート「ICTやワークシートなど、いくつかの選択肢があり、自分にあった学び方を選ぶことができる」は85.7%、「授業はわかりやすい」は100%の肯定的評価が得られた。 ・生徒の理解の状況に合った教材や学習方法を検討し準備している。	A	・鳥大学生ボランティアと、学校行事だけでなく学習等に関する関わりを増やす。 ・ICTの活用方法について、他教科の授業を参観したり、研修を実施したりして、自分の教科で取り入れることは何か検討する。
2 生徒誰もが安心して学ぶことができる環境づくり	自己や他者を理解	・自分のトリセツ（自己紹介や周りの人に理解してもらいたいこと等）や協働学習等を通して、自己や他者の理解を深める場面づくりをしているが、欠席する生徒も多く思うように進んでいない。出席している生徒同士は徐々に理解が深まっている。	・自分のトリセツや協働学習を通して、生徒同士が適切な距離感で自己の得意・不得意を伝えたり、仲間の得意・不得意を理解したりすることができる。 ・互いに声を掛け合いながら、安心して学校生活を送ることができる。 ・生徒アンケート「学校では安心して学んだり生活したりすることができる」の肯定的評価 80%	・自分の取説や各授業で行われる意見交換、協働学習を通して、相互理解を深める場面づくりを行う。 ・教育相談、学習面談等を通して、自己を見つめる場面を作る。	・生徒アンケート「学校は安心して学んだり生活したりすることができる」は83.4%だが、学校生活に起因しない理由等で欠席している生徒が半数いる。 ・相互理解を深める場面を意図的に作っているが、出席者が少なく協働学習が成立しないことがある。 ・学習面談以外に、心身の健康に関する面談を行い、健康課題を把握して安心・安全な学校生活を促進している。	B	・学習場面でのルール（発言の仕方、聞く態度など）の見える化を図る。 ・引き続き日常の学校生活、教育相談や学習面談等を活用し、自己を見つめたり、他者理解を促す機会とする。 ・必要に応じて福祉や就労等の外部専門機関と連携する。
	意欲と自信の向上	・様々な理由で登校ができていない生徒がいる。 ・授業への新鮮さから意欲的に取り組む姿が見られる。 ・不登校等が原因のため、「自分ではできていない」という思いを持った生徒が多く、自己肯定感を高めるための支援が必要である。	・生徒が自分に合った学び方を選択し、主体的に学習を進めることができる（再掲）。 ・生徒アンケート「学習を積み重ね、自信がついてきている」の肯定的評価 80%	・「わかった」「できた」を実感し、賞賛や励ましの言葉を伝える場面のある授業づくりを行う。 ・T2、T3による学習支援の充実を図る。	・生徒アンケート「学習を積み重ね、自信がついてきている」の肯定的評価は42.9%であり、自己肯定感を高める方策が必要である。 ・生徒の様子をみて、声掛けを工夫したり、T2、T3の支援の仕方を改善したりしている。	C	・学習面談等の結果等を個別の学習計画に追記した上で、教科担当者や情報共有を図り、個々の目標達成につなげる。（再掲） ・個別の学習計画をもとに、スモールステップで段階を追って小目標達成を重ねる。 ・数学においては生徒の苦手意識が強いため、学びの積み上げ状況に応じた複数の問題を用意し、学習支援にあたる。
	対人コミュニケーションの活性化	・自分のトリセツ、協働学習等をきっかけに相手に関わりをもととする生徒もみられるが、欠席のためその機会を逃してしまいが、まだ関わりが持てていない生徒もみられる。	・授業の中での教え合いや協働学習を通して、仲間との関わりを持ちコミュニケーションをとることができている。 ・生徒アンケート「仲間とつながりを持ち、力を合わせて活動している」の肯定的評価 80%	・教職員対象の研修会、生徒対象の講演会等を行い、日常生活でのコミュニケーション力向上につなげる。 ・生徒会活動（校内美化活動等）を通して、生徒同士が関わりやすい環境づくりを計画する。	・生徒アンケート「仲間とつながりを持ち、力を合わせて活動している」の肯定的評価50.0%は、登校している一部の生徒の結果であり、コミュニケーションの活性化というまでには至っていない。 ・SCと相談し、生徒の対人コミュニケーションに関する授業を企画している。	C	・生徒が自分の得意な方法で学習し、一人ひとりでゆっくり考える時間を持ち、そのあとみんなで協力して課題に取り組む。 ・お互いの良いところを学び合い、学んだことを個人に戻し、さらに理解を深めていく。
3 学び直しを希望する人とつながる（ニーズの掘り起こし）	開かれた教育活動の展開	・まな森文化祭等、校内のイベントへの外部の方の参加を企画している。 ・学習ボランティア（鳥大生）の受入れを計画している（再掲）。	・地域住民との交流が始まり、地域に開かれた学校となりはじめる。 ・鳥取大学、県立高等学校等、主に近隣の学校との連携が進む。	・地域住民が参加できるイベント（文化祭等）の開催や近隣学校同士の連携、協働を促進する機会を設ける。 ・ホームページやSNSなど、学習成果の発表の場を増やす。 ・地域イベント等での学習の成果物等を展示する機会を設ける。 ・学習成果をまとめた動画を作成・配信する。	・学校見学や学校説明はいつでも可能として対応しているが、地域住民との交流はまだできていない。 ・鳥取大学学生のボランティアや近隣の学校との連携は進みつつある。	B	・学校生活における日常の様子を短時間動画をつくって発信していく。 ・体験授業会以外の日でも随時、授業体験の受け入れができるようにする。
	効果的な広報の工夫	・ホームページ、SNSにより、教育活動を随時情報発信している。 ・体験授業会等の機会を捉え、チラシ等の配布を計画している。 ・メディアへ情報提供をしている。 ・体験授業会、学校説明会の開催を企画している。	・まなびの森学園の存在が県民に広く知られ、学び直しを希望する人が相談できる環境となる。 ・本校のコンセプトを理解した入学希望者が増加する。	・ターゲット層に合わせたバリアフリーな広報を行う（学び直しを希望する人に合わせ、やさしい日本語や多言語での情報発信等）。 ・ホームページ、SNS、チラシ配布等の紙媒体に加え、地域メディア（新聞、ラジオ、テレビ等）など、広報手段を多様化する。 ・広報効果の測定・分析（ホームページのアクセス数、SNSのフォロワー数等）を行い、分析結果に基づいて、広報戦略を改善していく。	・方策どおり多様な手段を活用して広報を行っているが、本校の認知度や学び直しを希望する人の増加には至っていない。	C	・鳥大学生ボランティアの方にもっと学校のことを知っていただいた上で、広報に協力してもらう。 ・本校が実施する様々なイベント等で事後アンケートを行い、どのようにイベント等を知ったかを尋ね、有効な周知方法について検討する。 ・外部へのチラシや配布文書等には、HPや動画等のQRコードを貼付する。
4 ワーク・ライフ・バランスの推進	自己研鑽とワーク・ライフ・バランスの実践	・教育センターの資源を活用するなど、生徒実態に応じた教材づくりに努めようとしている。 ・教職員は時間外業務削減を意識している。	・家庭・地域生活での活動や、自己目標に応じた自己研鑽の機会が確保できている。 ・全教職員が時間外業務月 4 5 時間、年間 3 6 0 時間を超えない。	・研修機会の情報収集・発信を行い、参加しやすい風土をつくる。 ・関係機関や地域等の資源・力を有効活用する。 ・年次有給休暇の取得を促進し、個々の仕事と生活のマネジメントを習慣化する。	・教職員は積極的に研修機会を捉え参加している。 ・校内衛生委員会で休み方改革を考え、セレモニー休暇など、楽しむ休みを取得する提案等を行っている。	B	・必要な校外研修は、複数での参加が可能な体制をつくる。 ・衛生委員会等を活用し、リフレッシュしやすい雰囲気をつくる。
	業務効率向上とチーム学校の活性化	・開校初年度で業務の見通しが立たないものがあり、教職員間で情報共有を図りつつ、試行錯誤しながら業務計画を立て進めている。 ・学校運営上役立つ情報などを随時、整備し、教職員間で共有していく必要がある。 ・開校初年度の各教科ごとの授業を想定した教材を整備し、保有教材を見える化し活用している。	・業務に関する必要なものや情報等の共有化が図られ、業務に取り組みやすい環境が整っている。 ・次年度への業務引継ぎや改善点が明確になっている。 ・ICTの活用による業務削減、効率化が図られている。	・報・連・相を昼礼・夕礼・終礼のスモールステップで行い、協議事項をためず対応を円滑にする。 ・物品や簿冊等の設置・保管場所の指定及び、校内情報共有DBの活用と記録による業務の可視化と共有化を図る。 ・事務作業のフロー図提示や、要不要を見極め簡略化を図る。 ・気付いた業務改善点を共有し、次年度以降の計画的な業務進行に反映させる。 ・学校行事の検討、精選等により、運営の簡素化・省力化を進める。	・校内衛生委員会で意見を出し合い、困りのある業務の改善を試みている。特に業務は、初めて行うことがあり、誰もがわかりやすいフロー図やわかりやすい手引きなどの提示が必要である。 ・少人数の職員体制で、各自の業務が多岐に渡るため、次年度に向けて学校行事等の具体的な簡素化を検討する必要がある。	C	・業務内容が分かりにくい場合は、業務に詳しい教職員に時間をおかず尋ねる。 ・学校行事については、計画段階で準備や練習にかかる時間を減らすなどの工夫をし、簡素化を図る。